

編集室から

毎年この時期、石川県庁の職員研修に携わらせて頂いています。

グループリーダー(係長)前後の方を中心に、課長推薦された方々が対象と伺っています。

ベースとなる研修内容は政策形成(立案)ですが、その採否から実施に至るまでは多くの関係部署・組織・団体から住民に至るまで、幅広い調査・調整や協働が求められます。このため、行政マンとしては、立案能力だけでなく、調整能力も含めた高いコミュニケーションスキルも求められるのが、現実です。

お手伝いさせて頂いている研修は、このような実態に即した視点・考え方を始め、必要なスキルの数々をワークショップを交えて習得・体得して頂くとする野心的なものです。

この研修は、当時部長でいらした方の発案で企画・構成に携わらせて頂いて以来、十年近く担当させて頂いており、大変光栄です。

立案に際しての課題自体も受講生で設定する形なので、私としても常に最新の時代潮流や、国の政策動向を承知していなければならないので、プログラム自体に大きな変化はなくとも、日々の情報収集と動向の理解が求められ、緊張感を抱きながら毎年、臨ませて頂いています。

さて、毎年、受講される方は大変優秀な方ばかりで、加えて気持ちも良い方ばかりなので、短い期間ですがご縁ができる事を楽しみにしています。

数ヶ月感にまたがって、複数日に亘る缶詰研修なので、講師としても体力的に相応の疲労感がありますが、帰途、夏へ向かう青空と白い雲のように、清々しい気持ちになれるのは、お世話を頂いている事務局の方々や、受講生の方々のお陰に違いなく、本当に有り難い事とご縁に感謝しています。(は)



のと
だらぼち

本ニュースにレギュラー執筆していただいている川畠さんが「能登だらぼち」を引き受けて改装開店されました。

上京された際、ご利用になってみてください。

のと だらぼち
03-5537-3078
17:00~23:00 日曜祝休

中央区銀座8-4-27
プラザ銀座ビル地下1階
(銀座外堀通りasics前)

このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。

2021/08
(株)アスリック
<http://www.neting.or.jp/usric>
〒920-1167
石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217
Fax 076-233-7375
Email usric@neting.or.jp

2021/08
(株)アスリック
<http://www.neting.or.jp/usric>

葉 月



和歌山県有田川町にて
by hama

「ワクチン接種は誰のため？何のため？」
先月は職域接種を危ぶむ話をしましたが、まさか申請が殺到して受付中止になるとは思いませんでした。充分量を確保したかに思われていたワクチンですが、あちらこちらの冷凍庫でひっそり眠っているのかもしれない。ただ、こうした混乱は、ある程度仕方のない事です。保健所も製薬会社も我々医療者も、そして行政にも初めての経験だからです。石油ショックの時には、トイレットペーパーが街中から姿を消しました。安全を見越して少し多めに抱えておきたいと思えば、ありうる事です。でもこれは、ワクチン接種にとって最も深刻な問題ではありません。

最も深刻な問題、言い換えるとワクチン接種の意義をも左右すること、それは接種率の伸び悩みです。新しいウイルスによるパンデミックは、そのウイルスに対する免疫を持つ人が一定の割合に達するまで終息しません。これが集団免疫です。実際に感染するのを待っていたのは何年かかるか判らないので、産み出されたのがワクチンです。かつて世界中で猛威をふるった天然痘も、種痘という原始的なワクチンのおかげで集団免疫が成立して一九八〇年にWHOから根絶宣言が出されました。集団免疫が成立するために必要なワクチン接種率は、少なくとも七十%とされています。今回の新型コロナウイルスは、八〇九十%の接種率が必要かもしれません。それは「感染が判りにくい」「症状のない人から

も感染が広がる」「ひとたび感染するとしぶとい」という極めて厄介なウイルスだからです。もし集団免疫が成立しないと、新型コロナウイルスのように感染力が弱く致死性も低いウイルスは、ひっそりと長く燃り続けることとなります。そして我々の弱みを見つけてはボツと炎をあげる、そうした状況が治療薬の開発まで続くと思われれます。

具体的に、我々の弱みを考えてみます。ワクチンを接種していれば感染しても軽くて済むはずですが、全身状態が悪いと話は違ってきます。例えば大きな怪我をしたり手術が必要な病気になったりした場合、一時的に免疫力が低下して感染に弱くなります。集団免疫が成立していない社会では、どこの誰がワクチン接種を拒否したせいで新型コロナウイルスに感染しているか判りません。怪我や手術のたびに、ワクチン接種を受けていても新型コロナウイルスのリスクが生じる事になります。それは、真面目にワクチン接種を受けた人が、受けなかった人のせいで不利益を被るといふ事です。また、燃り感染が長引いてウイルス増殖が続けば、新たな変異株が生まれる危険性も高まります。これもまた、社会にとって深刻な不利益です。

ワクチンを接種して抗体保有者を増やすことは、単なる手段ではありません。抗体保有者が増えてウイルスが世の中から根絶される、つまり集団免疫が成立して初めて接種の目的が達成されたと言えるのです。



【プロフィール】
（いがき としお）金沢大学北潟寮で、濱さんの二年後輩でした。濱さんは、とっつても怖かった…。卒業後は金沢を離れ、現在は温暖な讃岐高松で又ク又クしています。

濱の起業塾 『起業塾 廿八 概論⑩』

「方法論より目的論」という新刊がたらしい。

技術系の起業家だけでなく、どうしても「どうやって起業・成功できるか」という問が浮かび、その対策に心を砕き、奔走する。しかし、これらは方法論に服従してしまった結果に過ぎない。この状態で、進んでいくと、「そもそも誰のために何をしようとしているのか」という目的論が忘れ去られてしまう可能性が大きくなる。平地で真っ直ぐに生えたはずの竹が、何らかの理由で途中で曲がり、いつのまにか全く異なる方向へ伸びていくようなものだろう。隣り合う節同士はどこも折れていないので、遠くから客観的に眺め直さない限り、元々の方向と違ってしまっていること（逸脱問題）には、気づきにくい。

方法論とはHowを問うことであり、目的論とはWhyを問うことである。概論⑩で紹介した「ゴールデン・サークル・WhyHowWhat」で、Whyから始める重要性の指摘と、「方法論より目的論」を優先せよという指摘は、軌を一にする。

このWhyHowWhatは、概論⑦で紹介した

Visionary Explorer Workerとも重なっている。目的を志向するのはビジョナリーの役目であり、方法論を探索するのは、エクスプローラである。中間管理職の役割、方法論に従ってモノやコトを具体化するのがワーカーの役割となる。組織論としては、これで回るとされているが、個人のスキルアップでは、注意が要る。長年、職務を忠実にこなしていると、考え方の習慣が固着化してしまい、他の思考に移行すること自体が難しくなるようだ。

あるプロジェクトで、与えられた目標に対して、それを達成するために必要な方法論の探索を任されている職場環境にある場合、意識して目的を問い直そうとする必要がある。時代の潮流はどこへ向かい、潜在的に何が起ころうとしているのかを見極め、何が根本的な課題であって、そのためにどのような新しい社会を標榜するのか。誰かからの要求・要請でもなく、自発・内発的に問い答えを探そうとする姿勢。これが社会起業家に、特に求められるという目的論を見極め指向する考え方・指向性だとおもつ。

同書を早速、ネット注文した。読むのを楽しみにしている。

秋田市に移り住んで17年半が経った。その間、同じ町内会のなかで1度、引っ越しをしたが、ずっと秋田駅東部の住宅地（昭和45年以降に宅地化、秋田大学が近く集合住宅も多い）に住んでいる。

私が居住している地区の町内会は、1,000世帯を超える秋田市最大の町内会である。そのため他の町内会に比べて予算が多いようで、他ではできない町内会行事が可能なのだという。行事としては、4月の総会、市民一斉清掃デーをはじめ、付近に秋田大学が立地しているので留学生との交流会、女性部の県内バス研修旅行、赤い羽根共同募金や、地区のコミュニケーションセンターとも連携した健康教室や料理教室なども毎年開催されてきていた。70代の町内会の方からは、かつて町内会には野球部、女子バレーボール部などもあったのだという。町内会に付随して子ども会も月に1回、第三日曜日のごみ収集デーがあり、それが子ども会の予算に反映されているようだ。私が生まれ育った青森市の町内会（昭和30年代に宅地化された地域）に比べても、いま住んでいる秋田市の町内会は行事がとても多いと思ったものだ。

青森市のその町内会では少子化の影響もあり、子ども会が10年ほど前に解散した。子ども会の世話をする父兄もいないということだろう。かつては夏休みになるとラジオ体操があり、たくさんの小学生が朝に近所の公園に集まっていたが、25～30年ほど前からは、ラジオ体操に集まるのは子どもではなく高齢者が中心となっていた。

翻って、私が住んでいる「秋田市の町内会」も昨年3月の「新型コロナ感染」発生後は、一部の役員を集まりを除き全ての行事が中止となってしまった。総会は、私のような新参者が町内の方と話をする年に1回の機会であった。総会後は、弁当とお酒が出て懇親会である。総会ではほぼ無口な面々も酒が入ると別人である。この総会も2020年と2021年は2年連続の中止で、書面による総会の決議事項の審議が行われた。そのため、昨年、町内会長が交代したが新会長の顔もわからない、見たこともない状況である。

市民一斉清掃デーは4月の第2日曜日に行われる。この地区は水田を宅地化したものと思われるもともとの用水路（側溝）が随所にある。この作業の中心は、雪解けとともに泥やゴミも混じり水路にたまっており、それを取り除き石灰を蒔くものである。水路の泥を掘り、袋に入れる作業は重労働である。この冬は積雪も多く水路に泥が溜まり、この暑さもあり水も濁り異臭を放つときもある。その作業も2年連続で中止となった。

町内会も高齢化、役員の固定化、事業のマンネリ化など問題点が多く指摘されている。いまの町内会の総会でも出席される方の多くは、町内に住まれた第1世代にあたる方（60代後半から70代以上）が中心で、50代でも若手の範疇に入らるだろう。しかしながら、役員の方々の努力で町内会活動が続いてきているが、それらの問題点にまたこの「コロナ禍」により中止や延期が加わった。

お祭り、花火大会、成人式などの中止や延期に目が向きがちであるが、私たちが最も生活の基本単位とする町内会活動にも目を向けて欲しいものである。

梅雨も明けてまた東京の体にまとわりつくような蒸し暑い季節がまたきました。地球温暖化という情報に影響を受けているのもありますが、体感でも間違いなく年々暑くなっていることを感じます。とまあ、いつもの季節の候のような話から始まりましたが、このコロナ禍で時間があるという事もあり50歳を目前に資格取得に目覚めたというお話をしたいと思います。商売に直結するものもあれば、何の気なしに取得してみようかと思ったもの、若かりし頃に一度は諦めてしまいその後喉に引っかかっていたような資格等々、この1年で5つの資格を取得または受験予定でして、三十年ぶりに机に向かう日々が続いています。

まずは最初に取得したのが防災士です。これは2日間の研修を受けて最後に簡単な試験をクリアすれば取得できる非常に簡単なものです。きっかけは町会の震災対策部に誘われた事と、昨今の日本各地で起きている災害を見てせめて家族を守るための知識は取得しておこうということからでした。

2つ目が簿記二級。大学生時代に会計ゼミにいたにも関わらず8点という冗談のような点数で落ちた資格です。当時は『そもそも興味がなかった』という理由をつけてましたが、経営者として十数年経営をしてきて果たして今の実力で合格できるのか？という事で受験しましたがさくっと合格しました。ここから「あれっ合格って気持ちいい」と思い始めたわけです。

3つ目が電気工事士二種です。実家が電気工事業をやっており、僕自身も取締役として名を連ねている以上最低限でも電気工事士免許は持っておこうと思ったのがきっかけです。でもこれが文系出身にも関わらず計算式を解くことがおもしろくてはまりました。筆記試験もクリアし先日技能試験もあったのですが自信满满で終えてきました。次は1種の勉強をスタートさせようかなと準備を進めています。

ここからは今から試験を控えている資格です。

4つ目が宅地建物取引主任者(宅建士)です。この資格の勉強に至った理由は、経営していた店舗の閉鎖に伴う物件管理会社とのトラブルによるものでした。情報の非対称性があるにも関わらず、一方的に事業者側に有利な特約などがつけられており、事業物件契約というだけで、住居の賃貸契約にあるような借主側に不利な特約の無効が適用されないことにすごく違和感を感じましたし、そこに契約時においてイメージできていない自分自身の管理能力のなさにも失望しました。今は個人や零細企業による開業が多い飲食店業界において同様なトラブルや悩みがあるのではないかと思います。飲食事業者であり+その方たちのリーガルチェック機能を果たしたいと考えてます。この10月に試験です!!自信は大ありです!!!!最後に今月から勉強をはじめたのが中小企業診断士です。この資格は二十代に3回受験をし見事撃沈した困縁の資格でもあります。この資格は会計士や税理士と同様の国家資格ではありながら土業としての『専門特権』がなく、どちらかと言えば企業内のビジネスパーソンのスキルアップに使われる性格が強いイメージがあります。それを今、なぜ?なのですが、『負け続きからの脱却・リベンジ』は全くないです。総合的にビジネススキルを今一度鍛えたいと思ったからです。起業して12年、一時期大手コンサル会社と外部委託契約をして活動していた時期もありましたが、最近10年くらいは飲食事業中心となってしまい、どこか不安になるわけです。『今自分が違う会社で働いたら利益を生み出せる人間なのか?』ということに。そういう利益至上主義に嫌気がさし起業したのですが、経営者にはやはり利益を出し続けていく事が最も重要な目的なわけです。コトラーやドラッカーの名言もわかるのですが、やはり利益を出すことでSDGsも含めて社会に貢献することもできるというのが今の僕の信念であります。だから逆説的になってしまうのですが、経営全般の総合資格である中小企業診断士を今の僕が勉強したらどう思うかや答えを導いていくのかを知りたいのです。2年くらいかけてじっくり取り組んでいくので、その勉強の過程の中で色々な気づきや反証したいことがあればまたここでお話したいと思います。

『相模の国から ～大魔神のたび～』 小山町セミナー2021.5.15~16
神奈川県南足柄市企画部・都市部・教育部参事 溝口 久

このところ実際に工場が建ってきているが、起工式のような晴れの舞台には何もしていない今の池谷町長が立つ。忸怩たる思いがあるが、前町長は4年間を休養の時と割り切っている。2年後のリベンジに期待したい。何せ、この頃は「次期町長の込山です」と名乗るのだから、並の人間とは違う。町長に振り返り頃には大規模流通団地、アクアイグニスの広大なリゾート、新東名のスマートインターチェンジも開通の頃になる。ジム、ゴルフに農業と体を鍛えることに余念はない。復活し元気な小山町を取り戻して欲しいものである。

次のバッターは伊豆市からやってきたNPO法人サプライズの代表の飯倉さんだ。「アイス屋がゴミを拾ったら教授になった」が講演題目だ。伊豆天城湯ヶ島でジェラート屋をやっていた時、新年早々空き缶が落ちていてけしからんとSNSにその写真と一緒に流したら「すべこべ言わんと あんたが拾え」と返ってきたことから、ことがスタートする。皆を巻き込みゴミ拾いが瞬間に広がっていく。この時が飯倉さんが“公”に目覚めた瞬間だったようだ。

氏のお話の中で気になったことは、アーティストとデザイナーの違い。「前者は自分が何を売りたいか、後者はお客が何を買いたかが視点になっている。自分は後者に徹してきた。ものを進める時にいかに当事者主義を広げていくかだ。」

最近、彼を際立たせたプロジェクトにドットツリーがある。これは「住宅と儲かる賃貸物件」がコンセプトに、「住むと働くをセットに」移住定住促進と企業支援がセットになったプロジェクトだ。現地に行くと2階建ての銀色に光るガルバニウムの外壁の長屋を周囲に、真ん中に開放的なオフィスや工房が分散する。生コン工場の跡地を再開発したものだ。建設会社からの相談を受け企画した。完成から5年を経て常に満室が続く。

飯倉さんに尋ねた「管理運営を任されているんですね、いくらで？」「いや、お金はもらうどころか家賃を払っている。もらったとしても月10万円程度ならもらわずに自由にやったほうがいい。それにこの存在が自分の広告塔だから。」なるほど、「場を作り、人をつなげ、コトを起こす」彼のライフワークを具現化した形そのものだからね。今ではアイス屋はやっておらず、内閣府地域活性化伝道師、総務省地域創造アドバイザー、静岡大学客員教授の肩書を持つようになっている。まだまだ何かをしでかしそうな飯倉さんであった。



次に登場するのは、神奈川県松田町にあるNPO法人アシガラパートナーズ代表の北村さんだ。お題は「公務員卒、地域ビジネスへの挑戦」。彼とは南足柄市に来てから知り合った。高校卒業後、一人暮らしがしたいと関西の立命館大学に進学。松田町からなら首都圏の大学へ自宅から通学できる。「必ず帰ってきて公務員になること」を親から約束させられ、卒業後は箱根町役場に入った。役場に10年ほど務めた後にWEBで物売る会社に入り技術を習得し独立。

松田町が神奈川県の旧松田土木事務所の土地・建物を購入、5千万円ほどかけて改修。これをどうする？町が直接使うあてはない。「子育て支援センター」と「ファミリーサポート松田」がこの施設に入ることは決まっていたようだが、スペースは有り余る程ある。使い方のアディアはあるけど、オペレーションする手はなかなか上がらなかった。自らここを使い切るか、はたまた入居者を募って大家的な事業を立ち上げるかだ。

そこで、本山町長が白羽の矢を立てたのが北村さんである。彼は独立後に町から特産品の販売はじめふるさと納税の代理事務を受けていたからだ。ここで入居者をとんでもビジネスの街と言うにはほど遠い松田町にあって容易なことではない。そこが彼の腕の見せ所だ。飲食店の屋台を集めるマルシェを主催していた経験がものを言う。出展者のネットワークを持っていた。その自信もあってか、町が旧土木事務所を「女性が輝き活躍する」拠点として改修した創生推進拠点「スプラボ」の指定管理者に名乗りを上げることになる。

管理委託料をもらうのではなく、逆に施設使用料を年間600万円を町に払うことが条件だ。他に手を上げる者はいなかった。そして現在、コインランドリー、24時間ジム、鍼灸院、ドローン事業者、釣り具メーカーが入る。NPOの事務所の一角にはコワーキングスペースもある。いくつかの目的をもった利用ができそうである。

彼は「行政の課題解決の一役を担うのが我々の使命だ」と勇ましいことを言ってくれる。ならば、「南足柄市にある区画整理と工業団地を造成する際に造った調整池があるんだけど、市は草刈りの予算を使って、何年かに一度あるかないかの洪水に備えているだけ、誰か使う人いないかな」と募集したところ、北村さんが蕎麦畑として、スプラボに入居しているドローン事業者の大田さんがドローン教室で使わせてくれと手を挙げてくれた。これで市は200万円を超える草刈り費用が助かるばかりではなく、蕎麦と言う地元産品が生まれ、ドローンだって災害時や観光PRの道具として協力してくれる人の縁ができたのだから、一石三鳥ぐらゐの効果がある。諦めないで使い続けると願わずにはられない。

